

「福井編」

ゆったりと流れる時間、 スローライフ福井流

築山桂 小説家



京都で生まれ、学生時代を過ごした大阪から、福井に移り住んで十四年が過ぎた。移住する前、不安がなかったと言えれば嘘になる。何をすることも不便そう、コンサートや舞台を観る機会も減ってしまうし、馴染めないかもしれない……。ところが実際に暮らし始めると、想像していた以上に自然が豊か、空気がきれいで水がおいしい、食べ物おいしい。それも特別なものでなく、家で炊いたご飯とか、スーパーで売っているお魚とか「普通のもの」のレベルが高い。何と言ってもコシヒカリのふるさとだし、海の幸・山の幸が豊富で新鮮だから、毎日の食事がおいしくて、それだけで幸せになれる。

季節の変化を身近に感じられるのも嬉しい。福井に来て最初の夏の終わり、風がちよつと涼しくなってきた頃、町じゅうの畑や空き地が一面の白い花畑に！ その小さな白い花が「越前そば」になる前の「そばの花」だということを、そのとき初めて知った。そんな風景が家の近くに広がっていることが、新鮮な驚きだった。

福井で執筆活動が続ける私は、「なぜ福井で？」と問われることが多い。今は、原稿はメール等でやりとりすることができるし、実は福井って東京や大阪からそんなに遠くない。私が書くのは歴史もの、時代小説だから、めまぐるしく変わる都会の情報はいらない。取材旅行で資料を集め、あとは福井で、ゆっくり仕事のペースをつくれればいい。仕事の合間に出かけるのが、福井市郊外にある史跡・一乗谷朝倉氏遺跡。戦国時代の城下町跡がそっくり埋もれて残っていた、というもので、復原が進む街並みを歩くと、四百年前の人々の息吹が感じられ、史的興味をかき立てられる大好きな場所だ。

単に観光で訪れただけでは味わえない「贅沢」を、住むことによつて味わえる日々。大阪の四天王寺で習い始めた雅楽「笙」を、福井でも続けている。神社の祭礼で演奏することもある。この地を拠点に、時には足を延ばし、若狭の海岸沿いで干物を買ったり、卵のような外観が目を惹く勝山の恐竜博物館で遊んだり。新興住宅街で生まれ育った私には、地域の歴史や文化に触れられることがとても楽しい。

福井県はさまざまな指標で「住みやすさ日本一」「豊かさナンバーワン」と評価されている。その指標は多様だが、私にとって福井の魅力は——生活に根づく伝統行事に参加したり、そばの花がきれいだと立ち止まったりする「心と時間の余裕」を持つることにある。そばの花はまだ先だけど、半夏生（七月二日）の頃、暑い夏を元気で乗り切るために浜焼き鯖を一本まるごと食べる——そんな素敵な風習が残るここ福井は、本当に豊かな町だと思う。 **【響】**

つきやま けい 小説家

京都府生まれ。大阪大学文学部卒、同大学大学院博士後期課程単位取得。著書に、NHK土曜時代劇「浪花の華」としてドラマ化された「緒方洪庵 浪華の事件帳」シリーズ『禁書売り』『北前船始末』ほか、『初雪の日』『御堂筋の幻』『夏しぐれ』『冬の舟影』『春告げ鳥』『てのひら一文』『闇に灯る』など。2004年げんでん芸術新人賞受賞。

<http://tsukiyama-kei.jp/>

